2009 Peer Review of Teaching

# 京都大学のFD

## 2009 公開授業・検討会
## 実施報告書

2010年3月 京都大学FD研究検討委員会

京都大学のFD

■ 京都大学ＦＤ研究検討委員会では、主催事業の一つとして、「公開授業・検討会」を開催しています。

■ 公開授業・検討会は、

（１）普段の授業の一コマを公開し、関心のある教員が傍聴する「公開授業」 と、
（２）当該授業のねらいや進行方法について振り返り、よりよい授業について互いに考え合う「検討会」
との２部構成で実施しています。

■ 公開授業・検討会は、高等教育研究開発推進センターが企画・実施してきた事業ですが、2008（平成20）年度からはＦＤ研究検討委員会の主催として年２～４回開催しており、全学的な参加を呼びかけています。

■ 2009（平成21）年度からは、これまでの公開授業・検討会に加え、文学研究科プレＦＤプロジェクトとして、同研究科のOD（オーバードクター）が担当する学部生向けゼミナールを公開し、授業終了後検討会をおこなっています。

# 相互研修型FDにおける公開授業・検討会

FD研究検討委員会委員長
高等教育研究開発推進センター長　　田中　毎実

京都大学の公開授業・検討会は、高等教育教授システム開発センター（現・高等教育研究開発推進センター）が全国の大学で初めて、1996年度から1999年度にかけて実施した、公開実験授業プロジェクトに端を発しています。

高等教育研究開発推進センターでは、設立以来、「相互研修型ＦＤ」を理念として活動を進めてきています。相互研修型ＦＤとは、それぞれに固有の文脈に埋め込まれた自律的な教員・組織が、相互に影響し、協働しあいながら、教育する集団として形成されていくことをめざすものであり、従来わが国に見られがちだった、啓蒙型・操作型のＦＤとは対比的な考え方です。公開授業・検討会は、一つの授業を様々な分野の教員が集団的に検討する大学教員の相互研修と位置づけられるものであり、相互研修型ＦＤの理念を具体化する重要な取組であると考えています。その意味で、公開授業・検討会が2008年度から全学委員会の下での事業として実施されることになったことには大きな意義があると思っています。

私自身、何度も授業を公開し、検討会で振り返りの時間を持った経験からして、大学の同僚でありプロである他の教員に対して授業を公開することには、並大抵ではない気構えが必要であることはよく承知しているつもりです。快く授業を公開してくださる数々の教員の方々の勇気とご協力に、改めて感謝と敬意を捧げたいと思います。

また、公開授業・検討会に参加される教員の方々にとっては、公開される授業が、ご自身の専門分野と直接的に関連していることは少ないと思いますが、全体のカリキュラムの中で授業をどう位置づけているか、学生との関係で授業をどう組み立てているか、学生の反応にどう対処しているか、といった視点で見ていくと、授業改善そして教育改善へのヒントが数多く得られると思います。そして何より、変わる学生を前にして、試行錯誤しながら授業に取り組んでいる多くの同僚と経験を共有できると思います。

なお、部局主催のＦＤ事業でも、各教員からご自身の授業について紹介される機会が増えており、相互研修型ＦＤの一環として注目しています。さらに本年度（平成21年度）からは、本委員会と文学研究科との連携により、文学研究科プレＦＤプロジェクトをおこなっています。教員各位、またＯＤなどの正規ファカルティ予備集団が自主的な授業改善・教育改善に向けて、こうした様々な機会を活用していただきますことを願っております。いずれにせよこれは、研究大学としての京都大学にふさわしい教育プロジェクトであり、学内で同種の試みがさらにひろがることを強く期待しています。

## 2009.12.7 月

田口真奈 先生
「ライフサイクルと教育B」（全学共通教育科目A群）

公開授業　14:45~16:15（吉田南構内　共北12）
検 討 会　16:30~17:30（吉田南構内　吉田南1号館201）

第1回　公開授業・検討会

# 「ライフサイクルと教育B」

全学共通教育科目A群

田口　真奈
（高等教育研究開発推進センター准教授）

## 1．科目の概要

### （1）カリキュラム上の位置付け

本授業は全学共通教育科目（A群）である。全学共通科目は、各学部の枠を越えて、原則として全学部の学生を対象として開講される授業科目で、A群（人文科学系及び社会科学系科目）、B群（自然科学系科目）、C群（外国語科目）、D群（保健体育科目）、EX群（大学コンソーシアム京都単位互換科目）の5群に区分されている。A群科目は、哲学・思想、歴史・文明、芸術・言語文化、行動科学、地域・文化、社会科学、複合の各系列に区分されており、本授業は、行動科学系に含まれる。前期に「ライフサイクルと教育A」が開講されており、内容の連続性から一年を通じて両方を受講することが推奨されている。

**（2）授業形態**　講義

**（3）単位数**　2単位

**（4）対象学生**　全回生

**（5）受講者数**　約10名

### （6）授業のテーマと目的

この授業全体の目的は、「教養教育としての教育学」である。私たちの人生と日常生活に関連する様々なテーマに関して、教育学や心理学等の観点から、学生とともに相互応答的に考えていくことをめざしており、「教育」「発達」「学校」「学習」などに関する前理解に働きかけ、これを真の意味での「理解」に高めていくことを探るものである。3人の担当者が「ライフサイクルと異世代間の相互形成―青年から大人へ」「ライフサイクルステージの変化と人間の欲求・役割の変化」「多様化の中での大学における学び」というテーマで授業を行う。

本公開授業は「多様化の中での大学における学び」というテーマに含まれる。そこでは、いくつかの比較事例を通じて、京都大学の学生である自己を振り返り、現在の大学における学びをライフサイクルの中に位置づけ、京都大学で学ぶことの意義を再認識すること、また、自らの主張を小論の形で著し、他人の文章を添削し、書き直すという経験を通じて、課題を設定して自分の論を展開するというスキルを身につけることを目的とした。

### （7）成績評価方法

毎回授業の最後に書き込む「何でも帳」の記述（第2回目より開始・出席点を含む）、および数回の小レポート、グループワーク、最終レポート（必須）などをもとに評価する。

## 2．公開授業

### （1）授業計画上の位置付け

8回目の授業であるが、授業者の担当回としては初回に当たる。最終的に「現代社会における大学の役割」という大テーマに関連して、小テーマをたて、自分なりの主張を説得的に論じる、ということを求めるため、本授業では個々の学生による課題設定がうまくできることを目的とした。具体的には、大学をとりまく変化について、グローバル化、大衆化という観点から講義を行った。

### （2）公開授業の流れ

50名ほどが入れる一般的な講義室。その中央前方部分を使い、演習形態の授業に適するように机を円形に並べた。パワーポイントスライドと映像、配布資料を使用。

### 14:45　導入

当日の受講生は6名。今回は、これから4回の授業のテーマである「現代における大学の役割」を考える上での導入であることを説明。また、本テーマは受講生の受講動機やこれまでの授業の議論をふまえた上でのテーマ設定であることを解説。

### 15:00　大学のユニバーサル化

大学進学率の増加についてのデータを導入として用いる。学生に昔の大学と今の大学で変わったところは何かという問いかけを行う。学生の反応を受けて、ユニバーサル化とグローバル化が現在の大学を捉えるるキーワードになっていることを説明。その後、マーチン・トロウの分類を紹介しながらユニバーサル化した日本の大学の現状を解説する。

### 15:30　大学のグローバル化

日本の大学が国際化しているかどうかについて学生に問いかけを行うことを導入として、グローバル化せざるを得ない日本の大学の状況を解説。そして、グローバル化を考える上で重要な要因の一つであるe–ラーニングについて、海外の事例や早稲田大学、東京大学の事例を紹介する。

★ ここで、早稲田大学や東京大学のe–ラーニングについて実際に映像を紹介しながら授業を進める。また、e–ラーニングについてどう考えるのかについても適宜学生に問いかけを行っている。

### 16:00　まとめ

得ることのできる情報量の増加や学びの場の多様性を、どのように捉えればよいのか考えてほしいという問題提起を行い、今後の授業展開を説明して終了。

## 3．検討会

◇ 検討会参加者　◆ 公開授業担当教員

◆ 大学で講義をするのは初めてで緊張した。パワーポイントに頼った授業展開しかできなかったため時間が余ってしまったこと、自分が十分に深められていなかった点で講義をしたことが反省点。また、問い自体が学生の問題意識には届いていないように感じる。

◇ これまでの授業の中で学生はディスカッションを繰り返している。ここではそれを深める必要があると考えられるが、今回の授業の中でディスカッションを行わなかったのは何故か。

◆ 今回の授業は、公開授業という性質上、参観者が多く、深い話がしにくいことを予想してた。したがって講義形式にしたが、次週以降はディスカッションを取り入れる予定である。

◇ ユニバーサル化とグローバル化と e–ラーニングを全て授業に組み込むことは難しいのではないか。全体を俯瞰する感じで講義を進めていっても、取りこぼすことが多いだろう。授業を組み立てる上で、重点を絞ることは考えていないのか。

◇ 検討会参加者　◆ 公開授業担当教員

◆ 新しいトピックスを取り上げるのは、教員側の学びも促進される。それが学生にとってよい方向に働けばよい。ただ、自分が十分に理解できないまま進めてしまう部分もあるので、難しい。

◇ 学生がノートを取るそぶりを見せなかった。それについてどう考えるのか。

◇ そもそも最近の学生はあまりノートを取らないように思う。

◇ 本授業の目的は事実の伝達ではなくその意味を考えさせること。ノートを取ることにはあまり意味はないのではないか。知識の伝達が学生のもっている意味システムを揺らすことができるのかどうかが問題であろう。

◇ 学生の知識に対する構えが軽すぎるように感じる。知識と経験を結びつける仕組みが、授業の中でしっかり構造化されていなければいけない。

◆ 授業をよくするためには第一に内容を考える必要がある。今回のテーマに対する自分の理解が深まれば、いい授業になるだろう。学生が満足するだけではなく、学生自身が学んでいくような授業は難しいと感じる。

## 4．公開授業担当教員のコメント

公開授業には何度も参加していますが、自分が公開する立場になったのは初めてで、また、京都大学において学部生を対象とした講義そのものも初めてであったため、とても緊張しました。検討会での指摘はどれもこれから授業者として考えていかなければならないことばかりでした。批判めいた指摘は全くなかったにも関わらず、「内容も方法もまだまだ不十分だな」、という反省の気持ちでいっぱいになりました。同時に、称賛めいた指摘は全くなかったにも関わらず、「次はもっといい授業ができるのではないか」という期待をもつこともできました。もう少し授業者として経験を積んだ後に、また他の人から授業に関する意見を聞いてみたいと思いました。

## 3限の概要

4限(14:45～16:15)に実施された今回の公開授業は、前のコマ(3限:13:00～14:30)からの連続講義であった。受講生は医学部3回生であり、3限は50名、4限は26名が受講した。まず4限の公開授業の前におこなわれた3限の授業について簡潔に述べておきたい。導入においては、授業者から医療従事者にとって医療面接等コミュケーションに関する知識がいかに重要であるかが、授業者自らの経験を交えて語られ、受講生への動機づけがなされた。その後、ややもするとノウハウ的なものに陥りがちになるという医療のコミュニケーションにおける課題が指摘され、本授業ではより本質的な視点からコミュニケーションについて考えるという目標が提示された。

その後、教室を稲森ホールから山内ホールに移し、受講生同士によるディスカッションを中心に授業は進められていった。まず本日の授業でディスカッションしてほしいテーマが書かれたシート（シート1が3項目、シート2が5項目）が配付されるとともに、受講生が1回生の時に自ら作成した外来患者支援サービス実習の感想文のコピー（PDF化したものを印刷したもの）が各自に返却された。この自らが3年前に書いた感想文の返却は、受講生にとって予期せぬもので、彼らに大きな驚きと刺激を与えていた。ディスカッションでは、1グループ6名程度に分かれ、実習の時のことを今思い返してみて持つ感想や、生き生きと浮かんでくる場面について受講生同士で話し合わせた。その後、グループディスカッションの結果について受講生に発表させていった。

★ 受講生にディスカッションの結果を発表させる際には、授業者自身が各グループを回りつつ、マイクを受講生に向けて対話形式で答えさせていた。
受講生からは医療ボランティアスタッフなどとのコミュニケーションが印象に残ったという意見が多く出された。授業者はこの間の受講生とのやりとりを通じて、臨床における物語性の大切さ、Narrative Based Medicine（NBM）の重要性を浮かび上がらせていき、4限のテーマである非言語的コミュニケーション（Non-verbal communication）へと授業の流れをフォーカスしていった。

## 14：45　医療における非言語的コミュニケーションの重要性

ここからが今回公開授業として設定された範囲である。教室は再び稲森ホールへと移る。4限では、3限最後の流れを受けて、医療における非言語的コミュニケーションの重要性に焦点を絞って授業が進められていく。最初に授業者の恩師に当たる先生の、スイス時代の話が導入として語られる。その先生がスイスの病院に勤めていた時、ドイツ語を使った患者との言語的コミュニケーションは必ずしもスムーズにはいかなかったにも関わらず、患者に異常があった際に一目散に駆けつけたり、暴れる患者の手をじっと握って患者の気持ちを鎮めたりといったことによって患者と同僚の信頼を勝ち得ていったというエピソードが授業者によって紹介される。

★ こうした、いわば目の前にいる授業者を通じて自らとつながっている医療従事者の具体的体験を語ることで、単に教科書に載っている事例を読むよりも、さらに実感的に受講生は非言語的コミュニケーションの重要性を認識することができる。

## 14：50　Personal Space

次に、受講生自身が非言語的コミュニケーションの重要性に気づくためのゲームがおこなわれる。受講生が2人1組になって向かい合い、4m、3m、2m、1.5m、0.5mと徐々に互いの距離を近づけつつあいさつを交わし、どの距離がお互いにとって comfortable と感じるかを考えさせる。このゲームによって受講生は、E. T. Hall の提唱した "Personal Space" の存在に、自らの体験を通じて気づくことになる。

★ 以上のように本授業は、授業者と受講生の対話と、受講生自身の体験を通じた学びを基礎として構成されている。しかもただ単に体験させるのではなく、まず受講生に体験を通じた気づきを促し、次に授業者が講義によって彼らの体験に理論的な裏づけをすることで、受講生自身がその体験を授業テーマの文脈に位置付けて理解することができるようになっている。そして最後に再び受講生に体験を与えることで、受講生の理解を実感・確認させているという点が特徴である。こうした、体験学習と講義を1コマの中で重層的に組み合わせることによって学生の「気づき→理解→実感・確認」を促す授業形態は、学生を主体とした多くの授業にとって参考となるものであろう。

◇ 何度か教室を移動した意図はどのようなものか。

◆ 体験学習をおこなうスペースが必要なことと、受講生がシートを記入する際の書きやすさを考慮して、ゲームやロールプレイをおこなう教室とテーブルのある教室の間を移動しつつ授業をおこなった。

◇ Narrative Based Medicine が重要であり、それにはコミュニケーションが不可欠だという水路づけをおこなっていたが、Evidence Based Medicine であっても患者からいろいろなことを聞き出すことは必要であろう。特にコミュニケーションと Narrative Based Medicine を結びつけた意図は何か。

## 3．検討会

◇ 検討会参加者　◆ 公開授業担当教員

◆ 今回のテーマはコミュニケーションであり、それ自体が漠然とした概念である。たとえば循環器内科の直接的な知識を学ぶような授業に比べれば、コミュニケーションについて学ぶことの必要性について受講生に理解してもらうことは難しいと実感した。また、この授業が受講生の進級・落第等の直接的な評価に結びつく授業でないことも、受講生側の授業に臨む切実さにマイナスの影響を与えているかもしれない。コミュニケーションというテーマは医学部だけでなく様々な分野で扱うと思う。検討会の参加者には様々な分野の方がいるが、コミュニケーションの必要性を受講生に理解させるためにどのような工夫をしているかを聞いてみたい。

◇ 今回はロールプレイをおこなったが、ロールプレイというものは本人がその役になりきらないと難しいところがある。受講生同士でロールプレイをする場合、各自どのような役割を演じてもらうのかについて共有することが必要ではないか。

◆ 受講生同士のロールプレイであっても、部屋を別にしてシナリオ作りを一定時間おこなっている。ただ、受講生同士だとすぐにだれてしまうといった難しさはたしかにある。たとえばロールプレイに模擬患者が入ってくれると、やはり受講生の反応は格段に違う。

◆ 基本的には受講生から出されたものを材料としており、それを Narrative Based Medicine と結びつけた。受講生が外来患者支援サービス実習に行った時、医療ボランティアスタッフとのコミュニケーションは印象に残っているが、患者とのコミュニケーションはあまり印象的でなかったようだ。前者が印象に残ったのは、医療ボランティアスタッフとの関わりにある程度の時間経過が存在したためであろう。後々まで印象に残ったり生き生きと思い出される場面というのは、1つの物語が存在する場面や言語以外のものも付随して思い起こせる場面であるということを、また、単なる言葉のやりとりだけでは印象に残らないということを、彼ら自身の体験を振り返ることで明確にしたかった。このため、コミュニケーションの非言語的な箇所に焦点を当ててみた。

◇ 今回の授業のようにペアを作ってディスカッションするというようなことには、医学部の学生は慣れているのか。

◆ 医学部ではたしかにそうした授業は多い。受講生の多くは将来医師という患者とコミュニケーションをとる職業に就く。以前は就職してからそうしたコミュニケーションに自然に慣らしていったが、今では医学が進歩し知識も増えたため、意図的に学生の時からコミュニケーションについて教えるようになった。

◇ 受講生に自主的にペアを組んだりグループを作らせることは易しくないと思うが、今回の授業では授業者がグループ作りに介入・強制することはなかった。それはなぜか。

◆ 授業は学生のニーズがベースにあるべきと考えている。なので、できるだけそうした強制はしたくないと思っている。

◇ 模擬患者との医療面接が明後日にあり、模擬患者が余命幾ばくもないといった設定など、なかなかハードな内容とのことであるが、これに臨む学生の不安や緊張に配慮したりすることはあるか。

◆ たしかに明後日の医療面接はハードである。しかしカリキュラム全体を考えた時、そういったハードな面もあっていいと思う。そうしたハードな場面では学生のキャラクターが出るので、学生にそうした「素」を出させてみるという意図もある。

◇ 受講生がコミュニケーションを学ぶ動機づけであるが、やはりコミュニケーション「も」大事というよりは、コミュニケーション「が」大事だということをいかに伝えるかという点にかかっているだろう。たとえば、コミュニケーションがうまくいかなかったために失敗した事例を紹介して、コミュニケーションの大切さを切実に感じさせるところから始めてはどうか。

◇ 単なるスキルレベルを超えたコミュニケーションの仕方を教える際の指導を、どのようにおこなっているか。

◆ 医療に関するコミュニケーションは主としてアメリカで体系化されている。しかしそれらはノウハウであり、徹底的にスキルレベルの話である。京大医学部でも、4回生に対してはノウハウを教えている。しかし3回生向けのこの授業では、それ以外のものを模索したいと考えている。これについては現在も模索中であり現時点で明確な答えがあるわけではない。しかしたとえば、外来患者支援サービス実習に行った時、まだ自分が何もできなかったという体験をベースにコミュニケーションについて考えていくことも、その1つの方法ではないかと考えている。

## 4．公開授業担当教員のコメント

公開授業の後、たまたま他の科目の試験が直後に予定されており、出席した学生が普段より少ない状況でおこなれたことは、残念であった。モジュール形式のカリキュラムは、膨大な医学の内容を系統的に修得できる点で医学部の卒前教育にはメリットも多いが、試験を一定の期間に集約せずに実施することで、通常の授業への影響が生ずる場合があることに、まず考えさせられた。

この公開授業の後、様々な意見が寄せられたが、学生のフィードバックは、新鮮な体験としてとらえたものが多く、授業の意図は伝わったのではないかと考えられほっとする部分が多かった。しかし、当日のロールプレイやゲームの際には、学生の動きは緩慢であった。この点に関して公開授業の振りかえりの検討会で、もっと明確に学生に指示を出して、強制させるところがあってもよかったのではないかという指摘があった。これを参考に、その後の授業でたとえば、後ろの席に座る学生を前に移動させたり、ロールプレイの組み合わせを強制的に行ったりといった介入を、積極的におこなったところ、予想より、学生の生き生きした参画が得られて手ごたえがあった。どの程度、牽引的に授業を進めるべきかについては、一概には決められないかもしれないが、公開授業によって、具体的な示唆を得られたことは、予想以上の収穫があったと感じている。当日の検討会だけでなく、後日、非公式な振りかえりの会も行った。若い大学院生などの率直な感想意見が、非常に参考になった。

# 文学研究科プレ FD プロジェクトとは



## 本プロジェクトの概要

文学研究科長　芋阪 直行

2009年度より、文学研究科と FD 研究検討委員会が共同主催する「文学研究科 OD による連続公開ゼミナールとその検討会」が始まりました。これは、いわゆる OD(オーバードクター)という正規ファカルティの予備集団のためのプレ FD プロジェクトであり、全国的にみても他に類例のない、きわめて先進的な試みであるといえます。

具体的には、文学研究科の思想文化学科および現代文化学科に在籍するいわゆる OD が分担して、前後期各３コマ(思想文化学科２コマ、現代文化学科１コマ)のゼミナールを実施し、そのすべてを公開としました。毎回の授業終了後、20分程度の授業検討会を行い、授業の内容や形式に関して活発な意見交換を行いました。自らの教育を振り返り、自己を磨く良い機会となったと思われます。また、これらの授業実施を受けて、前期１回、後期１回の計２回、研修会を開催し、授業分担と研修会受講を条件として、参加者に総長名の修了証の授与をおこないました。このプロジェクトによって得た教えるという愉しみを、各自が将来に生かしていくことを期待しています。

## 本プロジェクトに至った経緯と今後の展開

文学研究科准教授　出口 康夫

研究室出身の若い OD 諸氏に学部生向けの入門リレー講義をお願いする。OD 支援策としては画期的なこの企画は、一方では「教歴の無い(浅い) 講師による授業の質をいかに確保すべきか」という悩ましい問題をもたらしました。OD 支援と講義の質の確保との間のこのジレンマを解くべく立案されたのが、今回のプレ FD 事業です。授業の質が疑問視されている「新米教師」とは誰あろう、我々の元教え子です。我々には、彼ら彼女らの大学教師としての力量を高める責務がある。そのために大学における「教育実習」の機会を提供し、その中で授業の質の向上を図るべきではないか。プレ FD は、我々にこのような責任を自覚させるきっかけにもなりました。さらに以上の発想に潜む「上から目線」も、プレ FD 活動に伴走する過程で修正を迫られます。若手講師諸氏の奮闘は、我々「非新米教師」にも、「いかに面白い授業を行うか」について改めて悩み模索する機会を与えてくれたからです。

# 2009 年度文学研究科プレ FD プロジェクト 日程と授業テーマ

前　期

## 哲学基礎文科系ゼミナール I（2009 年4月8日～7月29日）

水曜日1限　8:45 ～ 10:15　　検討会　10:20 ～ 10:40

**授業テーマ**

杉山卓史　「芸術分類論」
相澤伸依　「セックスを哲学的に考える」
山口雅広　「なぜ「告白」することが哲学的でありうるのか
　　－アウグスティヌス『告白録』への招待」
長田蔵人　「カントと自然神学の問題」
今出敏彦　「ハンナ・アーレントの
　　『人間の条件』再考－現代キリスト教思想の可能性を求めて」
佐々木崇　「テイラーの宗教論」
山内　誠　「悪の象徴系－ポール・リクールの象徴解釈学」

## 哲学基礎文科系ゼミナール II（2009 年4月9日～7月23日）

木曜日2限　10:30 ～ 12:00　　検討会　12:05 ～ 12:25

**授業テーマ**

鶴田尚美　「動物解放論」
大月栄子　「キリスト教教義の成立と教父の思想」
林　誓雄　「「道徳感情論」入門－D. ヒュームと A. スミスの倫理思想」
横田蔵人　「神の存在を証明する「五つの道 five ways」
　　－トマス・アクィナス『神学大全』から」
大西啄朗　「カリー・ハワード同型対応入門」
田鍋良臣　「『存在と時間』入門」
長谷川琢哉　「承認をめぐって」

## 基礎現代文化学系ゼミナール（2009 年4月10日～7月10日）

金曜日2限　10:30 ～ 12:00　　検討会　12:05 ～ 12:25

**授業テーマ**

山口育人　「現代世界と国際通貨」
冨永　望　「戦後天皇制の出発」
小林敦子　「革命芸術と芸術革命」

## 前期文学研究科プレ FD プロジェクト研修会

2009年7月15日（木）　14:00 ～ 17:00

後　期

## 哲学基礎文科系ゼミナールⅢ（2009 年10月1日～ 2010 年1月13日）

水曜日1限　8:45 ～ 10:15　　検討会　10:20 ～ 10:40

**授業テーマ**

吉沢一也　「現代におけるプラトンの『国家』」
佐藤慶太　「「歴史の哲学」の歴史－20世紀初頭ドイツに焦点を絞って」
三宅岳史　「ベルクソンと神経学－科学万能主義とスピリチュアリズムの関係（19世紀後半フランス）の一例として」
守津　隆　「西田幾多郎の哲学」
堀川敏寛　「西洋思想と東洋思想の間、現代ユダヤ哲学の諸特徴－マルティン・ブーバーの対話思想を手がかりとして」
山本圭一郎　「「帰結主義」と「非帰結主義」」

## 哲学基礎文科系ゼミナールⅣ（2009年10月～2010年1月7日）

木曜日2限　10:30 ～ 12:00　　検討会　12:05 ～ 12:25

**授業テーマ**

田中美子　「詩人哲学者のひらめき」
中村　健　「徳の倫理学」
片山茂樹　「意識の発達段階について－ケン・ウィルバーの初期思想」
小城拓理　「ジョン・ロック－その人と時代、そして哲学」
川口茂雄　「物語る自己」

## 基礎現代文化学系ゼミナール（2009年10月5日～12月21日）

月曜日2限　10:30 ～ 12:00　　検討会　12:05 ～ 12:25

**授業テーマ**

田中泉吏　「科学哲学への招待」
井上　治　「近代日本と伝統芸能」
川嵜　陽　「朝鮮における「皇民化」政策・戦争動員・言語」

## 後期文学研究科プレ FD プロジェクト研修会

2010年1月20日（水）　14:00 ～ 17:15

# 2009年度文学研究科プレFD プロジェクト研修会

**前期研修会**

2009年7月15日(木)
吉田南1号館 14:00～

## ■ 研修会の概要

**1. 参加者**

研修会対象者16名　　参観者22名(うち、学外より1名)

**2. プログラム**

**14:00　開会式**
開会の挨拶：FD研究検討委員会委員長　教授　田中毎実
司会：高等教育研究開発推進センター　准教授　田口真奈

**14:05　セッション 1. アイスブレーキング**
参加者の自己紹介と公開講座を担当しての感想

**14:25　セッション 2. ビデオ視聴**
講義ビデオの視聴

**14:40　セッション 3. 個人ワーク**
ワークシートとリフレクションシートを用いた自分の講義の振り返り
解説：高等教育研究開発推進センター　特定助教　半澤礼之

**14:50　セッション 4. 個人ワーク発表**

**15:10　セッション 5. ミニ講義**
「大学授業をどう創るか」
高等教育研究開発推進センター　教授　松下佳代

**15:25　セッション 6. テーマ設定**
ディスカッションのテーマ設定・グループ分け

**15:35　休憩**

**15:45　セッション 7. グループディスカッション**

**16:10　セッション 8. グループディスカッション発表**

**16:25　セッション 9. 全体ディスカッション**

**16:50　閉会式**
閉会の挨拶：文学研究科長　教授　苧阪直行
修了証授与：FD研究検討委員会委員長

**17:00　情報交換会**

## 3. 全体ディスカッションの内容

グループディスカッションを通じて、「学生の意見を授業に取り込む方法」や「自分の専門とは異なる内容を教えることについて」、「学生に抽象的な議論への関心を持たせる方法」などが検討された。 その後のディスカッションでは、以下のようなやり取りが行われた。

### 大教室における学生とのコミュニケーションについて

質問　具体的に、大教室でどのようにコミュニケーションをとればよいか。また、非常勤講師はほとんどの場合、講義相手の学生をよく知らないが、どのようにしたらグループディスカッション等が行えるか。

回答　100人単位でディスカッション形式の授業を行っているが、抵抗を感じたことはない。たとえ討論が盛り上がらなくても、教師が問いを投げかけることで学生に考えさせることができればディスカッション形式の授業の効果はあると言える。ただし、学生がディスカッションや意見を訊かれることに馴れていること・学生と教員がある程度互いを知っていること等が必要である。初めて授業に行く教員や、学生と直に接する機会の少ない非常勤講師等が行うには難しい面があるかもしれない。

### 専門と異なる内容を教えること、学生が実学を志向する傾向にあるということについて

意見　文学部や哲学科での研究が無益である・現実には役に立たないという考え方は古い。現代の情報化社会では、どのように情報を流すかというキャリアではなく、どのような情報を流すかというコンテンツが重要である。

## 授業をエンターテイメント化するべきではないという意見について

質問　どうしてエンターテイメント化してはいけないのか。授業に興味を持たない学生が多いなか、少しでも授業に関心を引きつけられるのであれば、エンターテイメント化してもよいのではないか。

回答　授業の目標がはっきりしない限り、いくら議論をしても、それはスキルのための議論になってしまう。最終的にはその授業がどのようなスキルあるいは知識の習得を到達目標にするのか、大学なり学部なり国の方針なりではっきりさせてもらわないと、教員は悩んでしまう。

## 授業の目標設定について

質問　外側から標準化された内容に沿って授業をするのが望ましいのか。

回答　参考までに、アメリカでは、授業で扱う本（複数）と求める知識の水準（単位認定試験における基準）について大学側が決めており、それに沿って授業をしているらしい。そのような目標設定があれば授業できるが、「哲学を面白いと思わせてほしい」、もしくは「授業時間中ずっと笑わせてほしい」等と言われても曖昧で困ってしまう。

## 全体のまとめ

■ 今期、プレFDプロジェクトで行った思想系のリレー講義に関しては、学生に思想系の学問に興味を持ってもらうことを目的としていた。

■ 哲学で教えるべきスタンダードがあるかどうかについては疑問が残る。また、そのようにスタンダード化されるのは避けたい。哲学系に関しては、既成の枠組みがあると授業が難しい。そのため、今期のリレー講義では、講師が自身の専門として研究している内容について面白いと思って授業し、学生を面白いと思わせてほしいという方針を定めた。ただ、これはある種の理想であって、いかにも京都大学的な研究指向、すなわち標準化とは反対の自由な方向へ行きたいという方向付けである。

■ エンターテイメント化することによってレベルの低い授業をするのではなく、面白く、かつ内容の水準も高い授業をして学生に興味を持ってもらうのは難しい。このリレー講義では、まず、1講師の担当時間が2コマしかないということに問題があったといえる。

## 後期研修会

2010年1月20日(水)
吉田南1号館 14:00～

### ■ 研修会の概要

**1. 参加者**

研修会対象者12名　　参観者15名

**2. プログラム**

**14:00　開会式**
開会の挨拶：FD 研究検討委員会委員長　教授　田中毎実
司会：高等教育研究開発推進センター　准教授　田口真奈

**14:05　セッション 1. アイスブレーキング**
参加者の自己紹介と公開講座を担当しての感想

**14:15　セッション 2. ビデオ視聴**
講義ビデオの視聴

**14:30　セッション 3. 個人ワーク**
ワークシートとリフレクションシートを用いた自分の講義の振り返り
解説：高等教育研究開発推進センター　特定助教　半澤礼之

**14:40　セッション 4. 個人ワーク発表**

**15:00　セッション 5. 学生の声の紹介**
受講生に対するインタビュー結果の紹介
まとめと紹介：文学研究科FD支援特別研究員　井上治　小城拓理　三宅岳史　中村健
解説：高等教育研究開発推進センター　特定助教　半澤礼之

**15:15　セッション 6. ミニ講義**
「大学授業をどう創るか」
高等教育研究開発推進センター　教授　松下佳代

**15:40　ディスカッションのテーマ発表とグループ分け**

**15:45　休憩**

**15:55　セッション 7. グループディスカッション**

**16:20　セッション 8. 全体ディスカッション & まとめ**

**17:05　閉会式**
閉会の挨拶：文学研究科長　教授　苧阪直行
修了証授与：FD 研究検討委員会委員長

**17:15　情報交換会**

## 3. 全体ディスカッションの内容

グループディスカッションを通じて、「授業内容をどのように決定するか(専門性と概説性のバランス、また講義の難度について)」「学生との双方向授業について(発問など、学生を巻き込んだ授業を行うことの是非や有効なやり方について)」「授業ツールの使用の是非や活用方法について(パワーポイント、リフレクションシートなどについて)」「学生の学びを促進させるには(学生の深い理解を促したり、モチベーションをあげるために必要なことや、取りうる方策について)」が議論された。その後の全体ディスカッションでは特に次の2点が議論された。

### 授業の双方向性や学生のモチベーションを向上させるための効果的な授業方法について

質問　板書中心やグループディスカッションなど、有効な授業方法具体案があがってきたが、それは普遍的なものなのだろうか。

回答　確かにそれらが通用するかどうかは学生のモチベーションとも関わってくる。例えば、板書中心の授業などはモチベーションの低い学生に対する強制力が働きうるし、グループディスカッションはモチベーションの高い学生に対してでないと難しいかもしれない。

質問　(授業の中での)グループディスカッションとはどういうことをするのか。

回答　グループディスカッションは学生どうしのやりとりから能動性を引き出すもの。

質問　授業のテーマによってグループディスカッションができるものとそうでないものがあるのではないか、また、実際に授業にグループディスカッションを取り入れるとすれば、具体的にどのような形で行うのか。

回答　確かにテーマによってはグループディスカッションという方法が難しいものがあるかもしれない。

質問　テーマによってやりやすさやりにくさがあるのは、実践的・技術的な話に終始しているからではないか(例えば、「実生活・将来への有用性の説明」といったものも同様ではないか)、普遍的なモチベーションを上げる方法といったことが置き去りにされているのではないか。

回答　哲学については古代も現代に通じる普遍的問題を扱っているはずであり、問題設定しなおせばグループディスカッションも歴史学ほど難しいものではない。

意見　学生の質問を(講師のプライベートに関するものも含めて)広く受け入れて、講師への関心をきっかけとして、授業内容やその学問分野への関心を高めている。それは実際やってみて(授業のテーマに関係なく)有効だと感じた。

## ＦＤリレー講義の目的について

意見　学生のニーズにどう応えるかという観点から、入門的な講義も含めた従来の授業と違う内容のものであった方が良い（我々にとってもここでしかできない授業になる）という意味で、若手研究者としてのメリットを前面に出す方が良い。

意見　現代文化学系のリレー講義に関して、全体の統一性という点で、それぞれの講義内容に幅がありすぎて、確かに学生もモチベーションを持ちにくかったかもしれない。

## 全体のまとめ

■『学生への教育効果を考えていない』授業でも学生がきちんと応じてきて授業が成り立っている京大という環境で授業ができることの幸福を実感する中で、効果的な授業方法はテーマによっても違うのではないかとか、こちらをさらけ出すことで相手（学生）と話が通じてくるのではないかといった、追いつめられた状況からくる経験を踏まえた意見が今回の全体の議論を深めてくれたのではないだろうか。

文学研究科プレ FD

■研修会に参加した文学研究科 OD からのコメント（前期・後期含む）

■ 授業の仕方に関する高等教育研究開発推進センターの先生方の説明は、普段の授業でも漠然と実感している点が多かったが、プロの視点で整理してみるとこうなるという意味で色々勉強になった。

■ ミニ講義では、このプロジェクトに参加している自分たちが現在どういう状況に置かれているのか、何を目的に、何を克服する必要があるのか、よりクリアに把握することができた。

■ 授業方法の改善につながる具体的なアイデアや工夫などを、教育学の専門の方や、ベテランの先生方から情報としてもっと詳しく聞くことができれば、自分自身の授業で生かすことができると思います。

■ 全体として他の講師の方々がどのように講義をされているのか、総括的に見ることができ、大変参考になりました。今後の自分の講義に生かしていきたいと思います。

■ 自分の授業のＤＶＤなどを検討して自分の授業の進行をワークシートという形で事前にまとめることは、主観的な経験の積み重ねを客観的な視点から眺めることができて、確かにＤＶＤを見るのは苦痛な点もありますが、その分良薬口に苦しというように、自分の授業を振り返るのに善い手段ではあると感じました。ワークシートも他に多様な授業の手段があるということを気づかせてくれるという点で、実際の授業の進行に役立てることができると感じました。

■ グループディスカッションや総合ディスカッションによって、この半期、自分たちが感じてきた課題や問題点を改めて認識できた。とくに、総合ディスカッションでは、講義ごとの検討会には参加されていない方も含め、多くの方々のご意見をうかがいながら、各問題について再度熟考することができたのが有意義だった。

■ 同世代の OD 問題的現状認識を共有する機会を与えて頂いた点が良かったです。これまでは個々の研究室でバラバラに経験値を蓄積していたことと思いますが、同時代的組織的な問題として大学側が取り組んでくださったことに感謝いたします。

■ 私たちは研究者として成長してきたわけですが、研修会を行うことで、文学研究科の多くの人間は教育者として生きていく必要があるという認識を共有出来た（そのきっかけとなった）気がします。「研究（論文を書くこと）」だけが重要という雰囲気じゃない場所が京大文学部にできそうで良かったです。

■ ＦＤのメソッドをもう少し体系的に身につけられる場になるとよいと思います。恐らく、高等教育に職を得るために、ＦＤはますます重要な要素になるでしょう。ですから、ここで研修を受けるときに、ＦＤというのはこういうものだという方法論を身につけておけば、それを職場でも活かせますし、授業の実践でも役に立つということが証明できると思われます。

■2009年度文学研究科プレFDプロジェクトによる講義を受講した学生の声

■ よかった点はそれぞれの専修で行われている研究をみたことで、自分が想像していたより幅広い内容を研究できることが分かったこと。悪かった点は３つの講義の内容が違いすぎてとまどった。ただこの授業の性質上当たり前なのかなとも思った。

■ パワーポイントなど、視覚的なものを積極的に用いていたところが良かったと思う。

■ 文学部は１回生でとれる専門科目がないので、こういう授業は学生からしてみるとありがたいです（単位的に）。

■ １学期で３人の講師が研究成果のエッセンスを教授されるということで、いずれの授業もややかけ足だった印象があります。しかし興味深い資料を提示されたのが良かったです。かなりの量の文献をまとめられていたので非常に便利でした。

■ 色んな先生がそれぞれ異なるテーマで授業してくれたので、興味の幅が広がったと思う。１人の先生が２回しかないので、充分に理解できたというわけにはいかなかったけれど、その分、自分でもっと調べてみようと思えた。

■ 先生の緊張感がよく伝わってくるときがあって、人前で話すことの難しさとか大変さがよくわかった。それでも、話すのが上手な先生もいて、自分が人前で話す機会があったら参考にしたいと思った。

## 参考 旧高等教育教授システム開発センター及び高等教育研究開発推進センターの企画による公開授業・検討会

1996 ～ 1998 年度　第Ⅰ期公開実験授業プロジェクト（高等教育教授システム開発センター）

| | 講義名 | 講師 | 日時 | 場所 |
|---|---|---|---|---|
| 通年公開 | 「ライフサイクルと教育」<br>全学共通科目Ａ群 | 田中　毎実<br>高等教育教授システム開発センター教授 | 毎週月曜日<br>４時限 14:45 ～ 16:15<br>検討会 16:20 ～ | 楽友会館２階 |

1999 ～ 2003 年度　第Ⅱ期公開実験授業プロジェクト（高等教育教授システム開発センター）

| | 講義名 | 講師 | 日時 | 場所 |
|---|---|---|---|---|
| 通年公開 | 「ライフサイクルと教育」<br>全学共通科目Ａ群 ※ | 田中　毎実<br>高等教育教授システム開発センター教授 ほか<br>〔リレー式〕 | 毎週月曜日<br>４時限 14:45 ～ 16:15<br>検討会 16:20 ～ | 楽友会館２階 |

※セメスター制への移行に伴い、2002 年度から「ライフサイクルと教育Ａ」（前期）、「ライフサイクルと教育Ｂ」（後期）として実施

■第Ⅰ期・第Ⅱ期公開実験授業プロジェクトの詳細については、
『大学授業のフィールドワーク－京都大学公開実験授業－』（京都大学高等教育教授システム開発センター編 2001年3月 玉川大学出版部）、
『京都大学高等教育叢書19　平成15年度公開実験授業の記録および公開実験事業8年間の中間的総括』（平成16年3月）ほかをご覧ください。

### 2004 年度　公開授業・検討会

| | 講義名 | 講師 | 日時 | 場所 |
|---|---|---|---|---|
| 第１回 | 「ディジタル制御」<br>工学部専門科目（３回生対象） | 萩原　朋道<br>工学研究科教授 | 12 月 1 日(水)<br>４時限 14:45 ～ 16:15<br>検討会 16:15 ～ 17:30 | 電気総合館１階<br>大会議室 |
| 第２回 | 「経済原論Ⅱ B」<br>経済学部専門科目 | 八木　紀一郎<br>経済学研究科教授 | 12 月 7 日(火)<br>２時限 10:30 ～ 12:00<br>検討会 12:10 ～ 13:30 | 法経０番教室 |
| 第３回 | 「ライフサイクルと教育Ｂ」<br>全学共通科目Ａ群 | 田中　毎実<br>高等教育研究開発推進センター教授 | 12 月 13 日(月)<br>４時限 14:45 ～ 16:15<br>検討会 16:20 ～ 17:30 | 楽友会館２階 |
| 第４回 | 「電気電子工学概論」<br>工学部専門科目（1 回生対象） | 大澤　靖治<br>工学研究科教授 | 1 月 11 日(火)<br>５時限 16:30 ～ 18:00 | 工学部<br>電気総合館３階<br>中講義室 |

### 2005 年度　公開授業・検討会

| | 講義名 | 講師 | 日時 | 場所 |
|---|---|---|---|---|
| 第１回 | 「ライフサイクルと教育Ａ」<br>全学共通科目Ａ群 | 松下　佳代<br>高等教育研究開発推進センター教授 | 5 月 23 日(月)<br>４時限 14:45 ～ 16:15<br>検討会 16:20 ～ 17:30 | 楽友会館２階 |
| 第２回 | 「ライフサイクルと教育Ａ」<br>全学共通科目Ａ群 | 大塚　雄作<br>高等教育研究開発推進センター教授 | 6 月 20 日(月)<br>４時限 14:45 ～ 16:15<br>検討会 16:20 ～ 17:30 | 楽友会館２階 |
| 第３回 | 「現代制御論」<br>工学部専門科目<br>（情報学科３回生配当） | 山本　裕<br>情報学研究科教授 | 10 月 20 日(木)<br>２時限 10:30 ～ 12:00<br>検討会 12:00 ～ 13:20 | 工学部総合校舎<br>213 号室 |
| 第４回 | 「ライフサイクルと教育Ｂ」<br>全学共通科目Ａ群 | 田中　毎実<br>高等教育研究開発推進センター教授 | 11 月 7 日(月)<br>４時限 14:45 ～ 16:15<br>検討会 16:20 ～ 17:30 | 楽友会館２階 |
| 第５回 | 「ライフサイクルと教育Ｂ」<br>全学共通科目Ａ群 | 米谷　淳<br>神戸大学<br>教育推進機構教授 | 11 月 7 日(月)<br>４時限 14:45 ～ 16:15<br>検討会 16:20 ～ 17:30 | 楽友会館２階 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 第6回 | 「酵素化学」<br>農学部専門科目<br>（食品生物科学科３回生配当） | 井上　國世<br>農学研究科教授 | 12月14日(水)<br>1時限　8:45～10:15<br>検討会 10:30～12:00 | 農学研究科２号館<br>応用生命科学専攻<br>第４セミナー室 |
| 第7回 | 「ライフサイクルと教育Ｂ」<br>全学共通科目Ａ群 | 大山　泰宏<br>高等教育研究開発推進<br>センター助教授 | 12月19日(月)<br>4時限 14:45～16:15<br>検討会 16:20～17:30 | 楽友会館２階 |

## 2006年度　公開授業・検討会

| | 講義名 | 講師 | 日時 | 場所 |
|---|---|---|---|---|
| 第1回 | 「ライフサイクルと教育Ａ」<br>全学共通科目Ａ群 | 井下　理<br>慶應義塾大学<br>総合政策学部教授 | 6月5日（月）<br>4時限 14:45～16:15<br>検討会 16:20～17:30 | 楽友会館２階 |
| 第2回 | 「現代の大学・大学生論Ａ」<br>全学共通科目Ａ群 | 溝上　慎一<br>高等教育研究開発推進<br>センター助教授 | 7月4日(火)<br>4時限 14:45～16:15<br>検討会 16:20～17:30 | 吉田南総合館<br>共25 |
| 第3回 | 「心理学概論Ｂ」<br>全学共通科目Ａ群 | 大山　泰宏<br>高等教育研究開発推進<br>センター助教授 | 11月21日(火)<br>1時限　8:45～10:15<br>検討会 16:20～17:30 | 吉田南構内４<br>共21 |
| 第4回 | 「ライフサイクルと教育Ｂ」<br>全学共通科目Ａ群 | 矢野　裕俊<br>大阪市立大学大学<br>教育研究センター教授 | 12月4日(月)<br>4時限 14:45～16:15<br>検討会 16:20～17:30 | 楽友会館２階 |

## 2007年度　公開授業・検討会

| | 講義名 | 講師 | 日時 | 場所 |
|---|---|---|---|---|
| 第1回 | 「教育評価の基礎Ⅰ」<br>全学共通科目Ａ群 | 大塚　雄作<br>高等教育研究開発推進<br>センター教授 | 5月22日(火)<br>3時限 13:00～14:30<br>検討会 14:35～15:45 | 吉田南１号館<br>共311 |
| 第2回 | 「工学倫理」<br>工学部専門科目（４回生対象） | 水谷　雅彦<br>文学研究科教授 | 10月12日(金)<br>2時限 10:30～12:00<br>検討会 12:05～13:00 | 電気総合館中講義室<br>（吉田ｷｬﾝﾊﾟｽ）、<br>電気第２講義室（A1-131）<br>（桂ｷｬﾝﾊﾟｽ）【遠隔講義】 |
| 第3回 | 「学力・学校・社会」<br>全学共通科目Ａ群 | 松下　佳代<br>高等教育研究開発推進<br>センター教授 | 10月25日(水)<br>2時限 10:30～12:00<br>検討会 12:05～13:00 | 吉田南１号館<br>共206 |
| 第4回 | 「ライフサイクルと教育Ｂ」<br>全学共通科目Ａ群 | 近田　政博<br>名古屋大学高等教育<br>研究センター准教授 | 11月19日(月)<br>4時限 14:45～16:15<br>検討会 16:20～17:30 | 楽友会館２階 |

## 2008年度　公開授業・検討会

| | 講義名 | 講師 | 日時 | 場所 |
|---|---|---|---|---|
| 第1回 | 「生活と環境の化学」<br>全学共通科目Ｂ群 | 山本　行男<br>高等教育研究開発推進<br>センター教授 | 5月8日(木)<br>3時限 13:00～14:30<br>検討会 14:40～15:40 | 共北25<br>（吉田南構内） |
| 第2回 | 「英語ⅡＡ(E2P02)」<br>全学共通科目Ｃ群 | Craig Smith<br>京都外国語大学教授 | 6月16日(月)<br>5時限 16:30～18:00<br>検討会 18:05～19:00 | 共西02<br>（吉田南構内） |
| 第3回 | 「教育史概論Ⅰ」<br>教育学部専門科目 | 辻本　雅史<br>教育学研究科教授 | 11月26日(水)<br>2時限 10:30～12:00<br>検討会 12:05～13:40 | 教育学部320<br>（本部構内） |
| 第4回 | 「診断治療学総論」<br>医学部専門科目 | 森本　剛<br>医学研究科講師 | 1月20日(火)<br>4時限 14:45～16:15<br>検討会 16:20～17:20 | 臨床第１講堂<br>（病院地区） |

2010年3月　京都大学FD研究検討委員会発行

公開授業・検討会については、

**FD研究検討委員会のホームページ**
http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/fd/index.php

公開授業・検討会を企画される場合は、**教育推進部教務企画課（電話 075-753-2430）**
又は**高等教育研究開発推進センター**まで連絡ください。

京都大学のFD